

国 語

2022年2月10日（木）

一般入学試験

<注意事項>

1. 受験票は机の右上に受験番号が隠れないように置くこと。
2. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
3. 試験中は机の中に何も入れず、机の上には鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム以外の物は出さないこと。
4. 試験中に問題冊子の印刷不備等に気づいた場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
5. 試験中に体調が悪くなった場合は、遠慮せずに早めに試験監督に知らせること。
6. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置くこと。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。



文華女子高等学校

第一問

- ① 部屋の [] に努める。 「ア 歓喜」 イ 寒気 ウ 換気 エ 喚起
- ② 自説を [] して譲らない。 「ア 固辞」 イ 固持 ウ 誇示 エ 故事
- ③ [] 然とした話。 「ア 漠」 イ 爆 ウ 幕 エ 暴
- ④ 亡父の遺志を [] いだ事業。 「ア 次」 イ 接 ウ 告 エ 継
- ⑤ 左右 []。 「ア 対象」 イ 対症 ウ 対称 エ 対照
- ⑥ [] 尚早。 「ア 時期」 イ 磁気 ウ 次期 エ 時機
- ⑦ 「境内」の読み方は [] である。 「ア きようだい」 イ きようない ウ けいだい エ けいない
- ⑧ 「偏る」の読み方は [] である。 「ア こだわる」 イ かかわる ウ みなざる エ かたよる
- ⑨ 「専念」の類義語は [] である。 「ア 果敢」 イ 没頭 ウ 散漫 エ 貫徹
- ⑩ 「横着」の類義語は [] である。 「ア 怠慢」 イ 緩慢 ウ 努力 エ 横断
- ⑪ 「辞退」の対義語は [] である。 「ア 撤退」 イ 受諾 ウ 飛躍 エ 突破
- ⑫ 「炎暑」の対義語は [] である。 「ア 繁栄」 イ 蒸発 ウ 酷暑 エ 厳寒

⑬ 非常に忙しいことを「が回る」という。

「ア口
イ足
ウ手
エ目
」

⑭ 努力や手助けがわずかで効き目がないことを「焼け石に」という。

「ア水
イ闇
ウ雨
エ雪
」

⑮ 「の光陰軽んずべからず」とは、人生は短いだから、わずかな時間でも無駄にしてはならない、という戒めである。

「ア一筋
イ一寸
ウ一回
エ一挙
」

⑯ 「行く」の尊敬語はである。

「ア参る
イ伺う
ウ行きます
エいらっしゃる
」

⑰ 「静かだ」と同じ品詞の語はである。

「アすると
イ冷たく
ウ鮮やかな
エあらゆる
」

⑱ 二月の異名はである。

「ア卯月
イ如月
ウ葉月
エ長月
」

⑬ は松尾芭蕉の書いた、俳句を織りませ、旅での見聞を記した紀行である。

「ア 枕草子

イ 徒然草

ウ 源氏物語

エ おくのほそ道」

⑭ 鋭い風刺やユーモアあふれる新奇な角度から人間社会を描いた『吾輩は猫である』の作者は である。

「ア 森鷗外

イ 太宰治

ウ 夏目漱石

エ 川端康成」

第二問 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、※のついた人名には脚注があります。

体は時間の感覚器

私たちは、何もしていないのに時間が経っていくのがわかるような気がするのですが、果たしてそうでしょうか。自分の鼓動を感じ、鳥が空を飛ぶのを見、虫の鳴き声を聞き、顔を動かしてみる、そんなちよつとした変化を通じて時間を感じ取っているのではないのでしょうか。そして、時間の長短については、心臓の鼓動数、鳥の位置変化、虫の声の（a）ヨクヨウ（リズム）、顔の動き、など前後の差異を測っておおよそを①推測していると思われます。知らぬ間に時間の流れの感覚を体が覚え、脳の働き自身が時間を意識するよう（b）キタえられているのです。私たちは時間と密着して生きていると言えるでしょう（あまりにも密着しすぎているので、かえってわからないのかもしれないかもしれません）。

今、CDからモーツアルトの音楽が流れています。音楽は（虫の声と同じで）、時間の流れを最も忠実に表現しているものです。時間を追って次々とメロディが連なっているからこそ音楽となるのですから。真つ暗闇の中で音楽を聴いていて、突然音が切れて沈黙してしまうか、あるいは同じ音だけがずっと続くと、音楽が切れたのか、時間が止まってしまったのか、区別することができないでしょう。むしろ、私たちは呼吸や鼓動のような体のリズムとか脳の感覚で時間を測っていますから、時間が止まったとは思わないのが普通なのですが、それを除けば、音の変化がなくなってしまうと時間が止まったと（c）錯覚するかもしれません。

その意味で、②音を聞く耳は時間の経過を忠実になぞる感覚器官ということができよう。それに対し、目は空間と時間の（d）双方を感じ取る器官です。「画像」（絵画や写真）を見るときは、空間の広がりだけを認識してお

り、時間の一瞬を切り取っています。

他方、時間の経過を見ているのが「映像」（映画やビデオ）で、異なった画像が次々と展開されることによって時間や空間の変化を楽しんでいるのです。もしも同じ画面のまま静止してすべてが動かなくなったら、時間が停止した世界を見ている感覚になるに違いありません。それが長く続いたら機械が故障したこしょうと思うでしょう。映像を見るという感覚には、時間の流れを読み取りたいと言う気持ちとどが背景にあるのです。このように、私たちは、耳と目を使って時間と空間を結び合わせた世界の有り様を捉えています。耳や目が不自由な人たちは、それに代わる手段さむ（触ったり、微妙な空気びみょうの流れをつかみ取る皮膚感覚や頭の中で想像して造形する能力）に優れていて、時間や空間を全身で感じ取っています。

伸び縮みする時間

私たちは、時間はすべての人に共通していて、客観的に存在していると思っています。だって、人ごとに時間が違っていたら、学校の時間や待ち合わせ時間が決められないし、電車や新幹線の時刻表も意味がなくなってしまうでしょう。X、本当にそうなのか、と疑うたがった人がいました。有名なアインシュタイン※2です。アインシュタインは、時間が規則的に流れていることを疑わなかったのですが、みんなが同じ時間を共有しているのだろうかと考えたのです。そのために私たちがどのようにして時間を合わせているかをじっくり考え、人が運動していると時間が流れる速さが異なっているということを見ました。時間が伸び縮みちぢしていて、人ごとに違った速さで動く時計を持っているのです。もつとも、その差はとても小さいので普段の私たちが気づくことにはないのですが、動く速さが光の速さに近づくとその差が大きくなることを予言し、実験で確かめることに成功しました。

また、ハツカネズミは一日中③せかせかと走り回り、ハチは一秒間で三〇〇回も羽ばたきます。私たち人間は、あんなに素早く行動できません。ところが、ゾウやウシはゆっくり歩き悠然と食べ物ゆうぜんを食べています。見ていて、なんだかまどろっこしい感じがしますね。人間に比べて、ハツカネズミやハチの時間は [A] 流れ、ゾウやウシの時間は [B] 流れているかのようです。実際、一秒間あたりに打つ心臓の鼓動の数を調べてみると、ハツカネズミやハチの鼓動の数は [C]、ゾウやウシは [D] ことがわかりました。 [Y]、動物ごとに時間の流れる速さが違い、それぞれ違った時間感覚で生きているのかもしれない。

一方、宇宙は一三七億歳だとか、地球は四六億歳だということを目にします。 [Z]、生命は三八億年前に生まれ、恐竜は六五〇〇万年前に (e) ゼツメツした、という話も知っているとあります。私たちの人生はたかだか一〇〇年ですから、億年や万年という長い時間を聞いてもピンときません。ましてや、そんな長い時間をどうして測ったのか、なぜ信用できるのか、疑問に思ってしまう。私たちの普通の時間感覚とずれているからです。時間というものには、日常の中で感じ取る時間と歴史的に積み上げられた時間があると思われれます。億年という時間は長すぎて感じ取るというわけにはゆきませんが、順々に証拠しやうこを示されると長い時間が経過したことがわかります。人間は、時間を客観的に捉えることもできるのです。人間以外の動物は今という時間だけを生きているように見えますが、④人間は過去に流れた時間を復元ふくげんすることができる唯一ゆいの動物ということができるとでしょう。

このように、私たちはさまざまな時間感覚を持って生きています。

(池内了『時間とは何か』より)

(※1) モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (一七五六一—一七九一)

オーストリアの音楽家で、古典派音楽の代表的人物。

(※2) アインシュタイン Albert Einstein (一八七九—一九五五)

ドイツ生まれの理論物理学者。相対性理論などを提唱したことで有名であり、それまでの物理学の認識を根本から変えたことから、「二〇世紀最高の物理学者」とも評される。

問一 二重傍線部 (a) から (e) について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二

X

Z

 の空欄に入る接続語として適切なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ でも ウ また エ たとえば オ すると

問三 傍線部①「推測」の対義語を漢字二字で答えなさい。

問四 傍線部②「音を聞く耳は時間の経過を忠実になぞる感覚器官ということができるとあるが、その理由として筆者が挙げていることを、「〜から」に続くように三〇字以内で抜き出して答えなさい。

問五 傍線部③「せかせか」の使い方として誤っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 彼女はせかせかした話し方をする。

イ 母は家事に追われて、常にせかせかした表情を浮かべている。

ウ 明日は大会があるので、気ばかりせかせかする。

エ 花見の準備でせかせかと動き回る。

問六

A

D

 の空欄に入る言葉として最も適切な組み合わせはどれか。次の中から一つ選び、記号で答

えなさい。

ア A ゆっくり B 速く C 少なく D 多い

イ A ゆっくり B 速く C 多く D 少ない

ウ A 速く B ゆっくり C 少なく D 多い

エ A 速く B ゆっくり C 多く D 少ない

問七 傍線部④「人間は過去に流れた時間を復元ふくげんすることができる唯一ゆいいつの動物とすることができる」とあるが、その

理由を、本文中の語句を用いて簡潔に説明しなさい。

問八 本文の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類は事物が変化する前後の差異を測ることでおおよその時間の長さを推測しており、その感覚を体が覚えることで、時間を意識して生活するようになる。

イ 人類は「音楽」「画像」「映像」などから耳と目を使って世界の有り様を見ており、時間の流れと空間の広がりを認識することができる。

ウ 人類や動物はそれぞれ違った速さで動く時計を持っているが、その差はとても小さいので、どの生き物も同じ時間感覚で生きているといえる。

エ 人類は日常の中で感じ取る時間と、歴史的に積み上げられてきた宇宙や地球の時間を、感じ取ることはできないが、数々の証拠から読み取ることができる。

第三問 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

祖母が危ないと知らせが入った。

急いで実家に戻ったのに、間に合わなかった。僕が着いたときには、祖母はもう息を引き取った後だった。家族と、数少ない親戚、それに集落の人々が集まって、山でささやかな葬儀をした。

寒村で生まれ、若くして結婚し、山に入植した人だった。林業で生計を立てていたが、ずっと貧しかったらしい。同期に入植した仲間はずっと何軒かだけが残った。三十代の若さで夫が亡くなってからは、林業が立ち行かなくなって牧場に切り替えた仲間のところへ働かせてもらいながら、娘と息子を育てた。娘は中学を卒業すると山を離れ、そのまま町で（a）トツツいだ。息子は高校で一旦山を出たが、役場に就職して戻ってきた。結婚し、生まれたのが僕と弟だ。

僕が知っている祖母の経歴は、それだけだ。働き者で、（b）寡黙カモクだった。

家の裏口から続く林に、朽ちかけた木の椅子がある。物心ついた頃からここにあった椅子だ。祖母はときどきここにすわって、向こうに続く森を見ていた。森のほかは何もないと思っていただけで、祖母には何が見えていたのだろう。最後に人の気配がして、ふりかえった。弟がマフラーをぐるぐる巻きながらこちらへ歩いてくるところだった。

「冷えるなあ」

そう言って、僕がすわっている隣で立ち止まった。それからぐるりと周囲を見まわして、

「ぜんぜん、①なんにも変わらなすぎて、逆に怖い」

弟は笑った。

「ほんとになあ」

僕も笑って相槌を打つ。実際には、表に植林してある白樺しろかばは僕らがここにいた頃よりも明らかに背を伸ばしていた。風が吹いて、弟が②身すくを竦める。

「今年の夏、海に行ったんだ」

「うん」

「大学のゼミのやつらと」

「泳いだのか」

弟は笑って首を横に振った。

「泳がないよ。③知ってるくせに」

僕たちは泳げない。山の中の小さな学校にはプールがない。麓ふもとの町には町営プールがあるから、そこに泳ぎを習いに行く友達もいたけれど、僕たち兄弟は中学を卒業した時点で水に浮くこともできなかった。

「兄貴は海を見たことある？」

「あるよ」

中学の修学旅行で道南をまわった。秋の日本海を見た。専門学校にいる頃は、港も近かった。それでも、海を見に行くことなどほとんどなかった。

また風が吹いて、弟が身を縮め、木々が④ざざあつと揺れた。

「夜、海の近くを歩いてたら、⑤山の夜の音がしてさ」

どきんと心臓が鳴るのが聞こえた。山の夜の音。それがどういう音なのか、僕は知っていただろうか。思い浮かべ

ようとするのに、静かな、どこまでも静かな（c）ヤミのような山の夜が目の前に広がるばかりだ。

「ほら、今日みたいな風の強い日の夜に、音がするだろう。木が風に揺れる音かな、ごおうって唸るみたいなさ」

「ああ」

木々が撓しなって出す音のことだろうか。葉を震わせ、枝を揺らし、何千、何万の木々が鳴る。怖がって祖母の（d）蒲団ふとんに潜り込んでいた弟の姿がよみがえった。

「あれが、海のそばで聞こえたんだ。思わず山を探したよ、海なのにさ。今の音、何だろう、って友達に聞いちゃったよ」

「うん」

「そしたら、海鳴りだった」

海鳴りという言葉は聞いたことがある。でも、それが山の夜の音と似ているなんて、知らなかった。

「不思議だよ、山と海で同じ音がするなんて」

弟は木々の梢を見上げて笑った。

「もしかしたら、海のそばで育った人は、山に来て海鳴りが聞こえることにびっくりするのかもしれないな」

淡い紫に染まりはじめた空を見上げる。白い月が山の端から出てきたところだった。空を見遣るふりをして、弟の横顔を盗み見る。⑥ こんなにやさしい顔をしていたのだったか。もうずっと、弟の顔をちゃんと見てこなかった気がする。泣いてばかりいた（e）オサナイ弟。手がかかるからと、ふたつ上の僕は気を遣った。いつのまにか、聞き分けがよくおとなしい兄と、人懐っこく誰にでもかわいがられる弟、というわかりやすい図ができあがっていた。それを不満に思ったことはないつもりだった。

でも、今、弟の顔を見て、胸の中の何か解けるのがわかった。解けるといことは、わたかま蟠っていたということだ。学校へ入ってみると、僕よりも弟のほうが少し勉強ができた。少し運動もできた。⑦そんなことを、僕はねた妬んでいたのだろうか。僕よりも弟のほうが少し母と祖母に愛されていたことも。

(宮下奈都『羊と鋼の森』より)

問一 二重傍線部 (a) から (e) について、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。また、カタカナは漢字に直して答えなさい。

問二 傍線部①「なんにも変わらなすぎて」とあるが、「弟」がそう感じていたのに対し「僕」はどう感じていたか。それがわかる一文を本文から抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問三 傍線部②「身をすく疎める」とはどのような様子か。最も適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 身体を伸ばす様子
- イ 身体を預ける様子
- ウ 身体を隠す様子
- エ 身体を縮める様子

問四 傍線部③「知ってるくせに」とあるが、なぜ「弟」が泳がなかったのを「僕」が知っていたのか。最も適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 「弟」が大学のゼミの友達とあまり親しくないのを知っていたから。

イ 「弟」が実は海に行っていないことを見抜いていたから。

ウ 「弟」が通っていた学校にはプールがなく、泳ぎを知らなかったから。

エ 「弟」は子供のころから海を怖がっていたから。

問五 傍線部④「ざざあ」は、自然界の音や物音を表す擬音語である。本文中から「ざざあ」以外の擬音語を五字以内で抜き出さなさい。

問六 傍線部⑤「山の夜の音」とは何の音か。本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑥「こんなにやさしい顔をしていたのだったか」とあるが、「弟」の人物像を以前どう捉えていたか。本文中の語句を用いて三十文字以内で答えなさい。

問八 傍線部⑦「そんなことを、僕は妬^{ねた}んでいたのだろうか」とあるが、「そんなこと」とはどんなことか。本文中の語句を用いて二十五文字以内で二つ答えなさい。